

Price Stickiness and Wage Stickiness in Generalized New-Keynesian Model
(一般化ニューケインジアンモデルにおける価格の粘着性と賃金の粘着性)

関東学園大学 王ゼイ

通常のニューケインジアンモデルなら、ゼロインフレ率における定常状態の近傍で線形化されるが、実際、主要先進国のインフレ目標はゼロではなく、年間 1%~3%の範囲に収まるようなインフレ率が許容される状況で、金融政策が実施されている。非ゼロ目標インフレ率が存在する一般化ニューケインジアンモデルを通常のニューケインジアンモデルと比べて、その静学的性質と動学的な性質は大きな違いが見られる。

本稿は非ゼロ目標インフレ率を持つ通常の一般化ニューケインジアンモデルに労働市場の独占的競争と賃金の粘着性を導入して、賃金の粘着性と価格の粘着性、労働市場の独占的競争と中間財市場の独占的競争がモデルの定常状態における産出と厚生レベルにどのような影響を与えるかについて分析を行って、さらに、目標インフレ率の変化によって、モデルの外生ショックに対する動学的な反応はどう変わるかについても分析する。

数値シミュレーションから明らかになった主な結論としては、(1) 労働市場の不完全性による定常状態に対するディストーションは中間財市場の不完全性によるディストーションと比べて非常に大きくなっていること、(2) 市場の不完全性を表す構造パラメータは定常状態の産出と厚生レベルに対して、異なる目標インフレ率のもとで、非対称的なディストーションを引き起こし、高い目標インフレ率のもとで、労働市場の競争の度合いの増加が産出レベルの低下をもたらすのに対して、1%~2%のマイルドな目標インフレ率となると、産出レベルに上昇する傾向が見られること、(4) 非ゼロ目標インフレ率はモデルの動学を増幅させる働きを持って、外生ショックの種類によって、その作用が違ってくると、といった点がある。